慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会構成主義の現在 : 物語の可変性と多様性をめぐって
Sub Title	
Author	野口, 裕二(Noguchi, Yuji)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008.) ,p.35- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 構築主義批判・ 以後
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会構成主義の現在

物語の可変性と多様性をめぐって

野口　裕二

はじめに

「構築主義批判・以後」という問題の立て方をするとき、本来ならばこれまでどのような批判がなされ、それに対してどのような応答や対応がなされてきたのかの全貌をまず明らかにしてから議論を始める必要がある。しかし、残念ながら、筆者はそうした論争の全貌を正確に把握していない。したがって、これから論じることは、筆者から見て代表的と思われる批判の一部に対する応答にすぎないことをあらかじめお断りしておきたい。そうした代表的な批判として、「構築されざるもの」、「語りえないもの」という二つの論点をとりあげる。そして、そのような批判から「構築主義」は何を学び、構築主義の新たな展開にどう生かしてきたのかについて論じる。さらに、そうした批判とは別に、「構築主義」が置かれている現在の状況をマクロな社会状況との関連で論じ、最後に、「構築主義」の新たな可能性をナラティヴ・アプローチとの関連のなかで展望したい。

なお、周知のとおり、social constructionism は、わが国では「社会構築主義」と「社会構成主義」の二つの訳語を与えられてきた。筆者は一貫して「社会構成主義」の訳語を用いており、その理由は野口(1997)などで示してきたが、本稿では、シンポジウムのテーマが「構築主義」を用いていることもあって両者を併用することにする。ただし、厳密な区別ではないが、Spector & Kitsuse（1976）の系譜に連なる議論においては「構築主義」を、Gergen の議論に連なる場合には「構成主義」の訳語を用いることにしたい。

1．「構築されざるもの」について

「何かが社会的に構築されている」と言うと、「いや、構築される以前から明らかに存在するものがあるではないか」という批判が必ずと言っていいほど返ってくる。物理的実在まで否定するのか、いまこうして議論している人間がいるではないかといった言い方もよくされる。この点については、これまでの構築主義、構成主義の論者の説明の仕方に誤解を招く可能性があったことは否定できない。たとえば、ちょっと口を滑らせて、「すべては社会的に構築される」という言い方をしてしまえば、それは明らかに間違いである。すぐにそれに対する例外を示すことができるので、この命題はあっさりと否定される。

もちろん、構築主義はそのようにすぐに否定される命題をわざわざ主張してきたわけではな

い。冒頭に述べたように「何かが社会的に構築されている」と主張すれば、ひとまず安全である。「構築されざるもの」という例外を示されても、この主張自体は傷つくことがない。「何かが社会的に構築されている」ことと、「別の何かが社会的に構築されていない（非社会的に存在している）」ことは両立可能だからである。前者の主張は後者の主張を否定していない。

では、「構築されざるもの」の存在を主張することは、構築主義に対する批判としてどのような意味を持ちうるのか。それには二つの場合が考えられる。第一は、「何かが社会的に構築されている」側面だけを見ていても不十分であり、「構築されざるもの」も同時に視野に収めて議論をしないと議論が不十分なものになるという批判、第二は、さらに強い批判で、「構築されざるもの」こそ第一に扱うべき対象であるのに、それを無視することは研究として適切でないという批判である。

これらの批判はともに、構築主義が「社会的構築」という社会過程を必要以上に重視している、過大評価していると考える点で共通している。そして、これらの批判に対して、構築主義は次のように答えることができる。「構築されざるもの」を重視するアプローチがありうることを否定しないし、それが適切なアプローチと思える場合にはそれをすればよい。しかし、それと同等の資格で、社会的構築という社会過程を対象とする研究もありうるし、それが適切なアプローチと思われる場合もありうる。一般に、研究アプローチというのは、何かに着目することによって必然的に何かを捨象するものである。すべてに目配りすることは原理的に不可能である。したがって、「構築主義」はひとつのアプローチとして成り立つ。ただし、それが適切かどうかの判断は、その都度、別の何らかの基準によって判断するしかない。

ところで、以上の議論は、世界が「構築されるもの」と「構築されざるもの」に二分される、あるいは、すくなくとも、世界にはこれら二つのものが含まれているという前提のうえに成り立っている。しかしながら、Gergen（1994）は、これとは異なるレベルで議論を展開する。彼は、「構築されざるもの」の実在に関しては「否定も肯定もしない」という立場をとる。そして、「そこに何があるのかを明示化しようとした途端、われわれは言説の世界に入り込む」と述べる（Gergen,1994）。

これは次のようなことを意味している。つまり、ここに「石ころ」がある。私はそれを眺めたり手に取ったりしている。そこに誰かがやってくる。私はその「石ころ」を手に取りながら、その誰かに、その「石ころ」について話し出す。「この石ころは・・・・・」。このとき、その「石ころ」は単なる物理的実在ではなくなり、社会的構築物に変容する。それは、「石ころ」という言葉によって指し示された途端に、「石ころ」という人間社会のまなざしが命名し名指すもの、さまざまな社会的意味を帯びた存在へと変わる。言葉を使った途端にそれは社会的存在へと変容する。

このように考えると、「構築されざるもの」について言及することの原理的な困難さが明らかになってくる。「構築されざるもの」について一言言及した途端に、それは「構築されたもの」に変容してしまうからである。つまり、私たちは、言語を用いて何かを伝えようとするとき、

かならずなんらかの社会的構築のプロセスに参加してしまう。それは、「構築されざるもの」について語るときも同様である。「構築されざるもの」という表現が、まさしく、「構築されざるもの」を構築してしまう。

以上のような議論は、われわれの日常的な思考を混乱させる。なぜなら、通常、わたしたちは、実在の世界がまずあってそれを後から言語が表象していると考えている。問題はそれがいかに正確に表象されるかどうかだと考えている。しかしながら、構築主義はそれとは異なる前提から出発する。実在の世界について何かを語ろうとした途端、私たちは「言説の世界」に入ってしまう。つまり、構築主義の立場からすれば、「実在の世界」は「永遠に語りえないもの」ということになる。「構築されたもの」と「構築されざるもの」という対比は、「語りうるもの」と「語りえないもの」という対比へと取ってかわられることになる。

ただし、ここで急いで補足しておかなくてはならないのは、構築主義は、従来の常識的な方法、すなわち、「実在の世界をいかに正確に表象するか」というアプローチが間違っているとか意味がないということを主張しているわけではないという点である。それはひとつのアプローチとしてこれまでも多くの成果を生んできたし、これからも有効であり続けるであろう。社会構成主義は、それとは異なるもうひとつのアプローチを提唱しているにすぎない。「言説の世界はどのような現実を構成しているのか」を問題にし、そのソーシャルなプロセスを対象とするひとつのアプローチである。したがって、両者は前提と視点を異にしている。どちらのアプローチがより適切であるかを決める普遍的基準は存在せず、その都度、目的や価値に照らして判断するほかない。

2.「語りえないもの」について

「構築主義批判」においてよく耳にするもうひとつのキーワードが「語りえないもの」である。構築主義が研究の対象にするのが言説の世界、すなわち「語られたもの」の世界である以上、「語りえないもの」は扱えない。そこにこのアプローチの限界があるというのが批判の主旨となる。前節で検討した「構築されざるもの」に関する議論が人間の外部の世界のありようを主に念頭に置くに対し、「語りえないもの」は主に人間の内部にあって「語りえないもの」の存在へとわれわれの注意を向ける。確かに、「無意識の発見」に端的に現われているように、あるいは、近年注目された「トラウマ記憶」のように、存在するのに語ることのできない何かがわれわれの中にあるという想定にはそれなりの説得力がある。しかも、それが実はわれわれにとってとても重要な意味をもつのだとすれば、それを扱えないアプローチは不十分なもののように思えるかもしれない。

この批判に関しては次のように答えることができる。前節で述べたとおり、「語りえないもの」については扱えないという点ではこの批判は構築主義の特徴を言い当てている。構築主義が「語りえないもの」を扱えないことに間違いはない。ただし、それを扱えないことがひとつのアプローチとして致命的な欠陥なのかというとそうとは言えない。前節で述べたとおり、あらゆる

アプローチは何かに着目することによって必然的に何かを捨象せざるをえない。という意味では、それだけではアプローチとしての欠陥とはいえない。むしろ、何かを捨象することで、別の何かが見えてくるのであればひとつのアプローチとして意味をもっているというべきであろう。物理学者に対して化学の視点が欠けていると言ってみても始まらない。何かが扱えないという批判は、それだけでは批判とはならない。

むしろ、「語りえないもの」への着目は、構築主義への批判としてではなく、その特徴を明確にするのに役立つものとして捉え直す必要がある。「語りえないもの」という言葉は論者によってきわめて多義的に用いられており、その多義性と曖昧さを明らかにし、構築主義と「語りえないもの」の関係をより明確にすることができるからである。

たとえば、次のような例を考えてみよう。「トラウマ記憶」がずっと語られないままあるひとを苦しめていたとする。しかし、あるとき、ひとりのセラピストとの出会いによってそれが「語られた」とする。このとき、その「トラウマ記憶」は「語りえないもの」ではなく「語りうるもの」に変わっている。より正確に言えば、昨日まではそれは「語りえないもの」だったかもしれないが、今日は「語りうるもの」になっている。このように考えると、通常、「語りえないもの」と呼ばれているものが、実はある時点で「語りえないもの」であって、なんらかの条件が変われば「語りうるもの」に変わる可能性があることがわかる。それを「語りえないもの」と呼んでしまうと、「語りうるもの」との区別が曖昧になり、議論が不明確になる危険性がある。

もちろん、どんなに条件が変わっても「語りえないもの」が存在する可能性を否定する必要はない。たとえば、いまの「トラウマ記憶」の例で、セラピストの前で何かが「語られた」としても、それですべてが語られたわけではなく、「語りえないもの」がまだ残っていると主張することは可能である。あるいは、われわれの日常においても、「なんかうまく言えないけれど」という経験はよくあるし、「筆舌に尽くしがたいこと」にも遭遇する。しかし、これらの「語りえなさ」や「語り尽くせなさ」は、それが原理的に語れないものなのか、いまのところ語れないものなのかどうかがはっきりしない。実際、「以前はうまく言えなかったけれど、いまは言えるようになった」という場合もあるし、長い年月を経て何かが「カミングアウト」されることもある。このように考えると、「原理的に語りえないもの」以外は、「語りえないもの」ではなく、「語られていないもの」と呼ぶほうが正確であるといえる。

以上の議論をふまえると、社会構成主義の立場からみて「語りえないもの」への着目は次の三つの意味をもっている。第一は、社会構成主義の守備範囲を確定してくれるものとしての意味である。社会構成主義は「語られた世界」、「言説の世界」を対象にしているので、文字通りの意味で語りえないもの、「原理的に語りえないもの」については扱うことができない。ただし、条件が変われば語りうるものについては扱うことができる。「語りえないもの」という言葉はこのことを明確にしてくれる。

第二の意味は、もっと積極的な役割で、ほんとうに「語りえないもの」なのか、なんらかの条件が変われば「語りうるもの」なのかを考察するという重要な検討課題を与えてくれる点で

ある。先に挙げた「あるセラピストとの出会い」に明らかなように、臨床の世界では、むしろ、「語りえないもの」を「語りうるもの」にすることをひとつの目標として実践が重ねられてきた。というよりも、「語りえないもの」だと思われているものが、実は、条件を変えれば「語りうるもの」であることを証明しようとしてきたともいえる。こうして、「語りえないもの」という言葉は「語りえないもの」と「語りうるもの」を区別するという重要な検討課題へとわれわれを導く。

そして、第三に、以上の議論をふまえて次のような新たな検討課題が生まれる。それは何が「語りえないもの」を生み出しているのかという問題である。「語りえないもの」というとき、これまで例示した「無意識」や「トラウマ記憶」のような精神分析系の概念は、「抑圧」という心的機制とセットで語られることが多かった。しかし、そうした心的機制とは別に、「たまたま語る機会がなかったから語られなかったもの」や、「聴き手が変わったら思わず語ってしまった」というような場合も存在する。また、ある種の病気や障害のカミングアウトのように、時代や社会の変化によって、それまで語れなかったことが語れるようになったという場合もある。これらの場合、「抑圧」というメタファーはふさわしくない。それはすくなくとも個人の内部に仕組まれた何らかの心的機制ではない。それは、社会的なプロセス、いつ、誰が、誰に、どのような目的で語るかといった社会的な諸条件の変化に依存している。

このような「社会的諸条件の変化」こそ、社会構成主義が注目するプロセスにほかならない。単なる「言語構成主義」ではなく「社会構成主義」と名乗る理由がここにある。社会関係や社会過程の変化がそこで生まれる言説とどのように関係しているのか、どのような社会的条件がどのような言説の産出を促し、どのような言説の産出を抑制しているのか、ここにこそ社会構成主義の独自の視点がある。つまり、社会構成主義は、単に語られる「内容」だけでなく、語られる「状況」をも重視する。さきほど、社会構成主義は「言説の世界」を対象にすると述べたが、それは「言説の内容だけ」という意味ではない。言説を産出する状況＝社会関係にも着目する。この点は、社会問題の構築主義における「クレイム」というキーワードにも端的に現われている。言説は、「誰が誰に向かって何のために語るのか」という社会関係を含んで成り立っている。

以上をまとめると、「語りえないもの」という概念は社会構成主義への批判の言葉としてではなく、社会構成主義の展開を助ける概念として重要な意味をもっているといえる。それは第一に、社会構成主義の研究対象を確定するための意味である。第二に、「語りえない」、「語るのが難しい」、「まだ語られていない」、「条件が変われば語りうる」といった区別を明確にしてくれる。第三に、「条件が変われば語りうる」というときのさまざまな条件として、心的機制だけでなく、語られる状況の変化、さらには、時代や社会の変化という社会学的変数の存在にわれわれの注意を向けてくれる。すなわち、「語りえないもの／語りうるもの」という区別ではなく、「語られたもの／語られていないもの」という区別をすることでそれらをもたらす社会的諸条件の検討という課題が生まれる。ちなみに、この区別は、社会構成主義をなんらかの実践場面

に応用しようとするときにとりわけ重要な意味をもってくる。それは、「いまだ語られていない物語（not yet said story）」という言葉で、社会構成主義に基づくセラピーにおける基本的な概念のひとつとなっている（Anderson & Goolisgian,1992）。

逆に言えば、これまで「語りえないもの」という言葉で、あたかも心的な機制の結果であるかのようにみなされてきたことが、実は社会的諸条件による統制の結果であった可能性が浮上してくる。「語りえない」のではなく、「語られていない」という用語を用いることによって、「語らせてくれない」、「語る場がない」、「語りの手本がない」等々のさまざまな社会過程が浮上してくる。ちなみに、このテーマは「心理学化」という用語ですでに検討されてきたこと（野口、2000）とも重なるが、「語りえないもの」という言葉を用いることが結果として「心理学化」と重なりやすいことも、社会構成主義の視点が教えてくれることのひとつといえる。

３．実在論的言説の優勢

以上、「構築主義批判」の二つのタイプに関して、構築主義がどのように答え、そこから何を学んできたのかを述べてきた。そこからわかってくるのは、批判によって構築主義がなんらかのダメージを受けたというよりは、むしろ、批判によって自らの独自性をより明確にすることができたという点である。「構築されざるもの」も「語りえないもの」も構築主義の弱点ではなく、むしろ、その長所を浮かび上がらせるのに貢献したといえる。

しかし、こうした論争の経過とは別に、日本における構築主義ブーム（批判も含めて）は上野（2001）、中河他（2001）が相次いで出版された 2001 年頃をピークにして次第にその勢いを失っていった。「構築主義批判」によってダメージを受けたわけではないのに、一頃のブームは去っていった。なぜ、そのようことが起こったのか。この問題を考察することは、構築主義の特徴や限界をまた別の角度から照らし出すのに役立つはずである。

その原因はいろいろ考えられるが、その大きな要因のひとつとして、ひとびとの関心がよりマクロな社会変動の方へと移っていったことが考えられる。2000 年代前半に進行したネオリベラリズム的な社会の再編とその帰結としての「格差社会」の進行というマクロな社会変動がそれである。こうしたマクロな社会変動を前にして、「ある社会的現実が社会的に構成されている」という視点は社会分析の方法としての魅力を次第に失っていった。端的にいえば、「いまこんなに格差社会が進行しているときに、何を悠長なことを言っているのだ」という感覚のほうが次第に勝っていったと考えられる。

ちなみに、ほんの数年前まで、「格差社会」という認識は決して一般的ではなかった。2004 年に山田昌弘の「希望格差社会」が出版され、2005 年に三浦展の「下流社会」がベストセラーになったとき、まだ、ひとびとは、いまほどは「格差社会」であることを自明の前提とは考えていなかった。そのような変化が徐々に進行しつつあるのかもしれないという程度の認識だった。しかし、あっという間にそれは現在の日本社会を語るときの「常識」となった。筆者自身の体験でいえば、大学１年生向けの社会学概論の授業で、2004 年度の講義では格差の拡大の兆

しについてふれただけだったが、2005年度以降は格差の拡大を統計的事実として語るようになった。こうした社会認識の変化のなかで、「社会問題がどのように構築されるのか」という問いは徐々に色褪せ、「いままさに起こっている格差社会という大きな社会問題にどう対応すべきか」という問いが優勢になっていったといえる。

以上のような社会状況の変化に関する認識がもしそれなりに妥当性をもつとすれば、以上の変化は次の点で社会構成主義の特徴を思わぬ方向から明るみに出したといえる。それは、社会構成主義的分析の魅力が社会状況のありように依存しているという点である。格差拡大というような大規模な社会変動がひとびとに認識されていないとき、社会構成主義的分析は社会の現状を探るツールとして、もっといえば、常識的な見方をひっくり返す道具として魅力的に映る。しかし、大規模な社会変動が起こり、その変化にひとびとの目が奪われていくような時代にあっては、社会構成主義的言説は魅力をなくしていく。社会構成主義あるいは社会問題の構築主義の立場に立てば、「格差社会」という「社会問題」がいかにして構築されていったのかは、格好の分析課題となってもよいはずである。しかし、そのような分析をする研究者はおそらくまだ現われていない。その理由は、そうした分析を受け付けないほどに、「格差社会」という現実が確固としたものに見えるためであると考えられる。

以上の変化は、構成主義的な言説と実在論的な言説の関係を考えるうえでもきわめて興味深い例であるといえる。格差社会論は、現実の社会において格差が拡大していることを統計的調査やインタビュー調査を用いて明らかにしようとする客観的実在をめぐる言説である。それは実証科学としての正統なスタイルを踏襲するものであり、社会学的言説の基本形ともいえるものである。一方の構成主義的言説は、さまざまな言説とそれに伴う社会関係を対象とするが、「格差」を実在としてとらえる視点をもたない。その点で、日常世界の常識にはそぐわない特異な言説である。そうした言説は、社会の変動の方向性が見えない、いわば停滞感の強い社会状況において、そうした社会を支える意外なメカニズムを明らかにすることで注目されるが、社会が大きく変動していると認識されるときには、その変動それ自体を説明する力をもたずその議論に参加できない。もちろん、構成主義は現実の社会的構築のプロセスを扱うという意味では「変動」を扱っている。しかし、それは「言説空間」の変動であって、「実在空間」の変動については沈黙せざるをえない。ここに構成主義のひとつの限界があることを、ここ数年の社会状況の変化は教えてくれている。

ただし、このような「限界」は当然ながら、社会構成主義にとっては自明な特徴のひとつであって別に驚くべきことではないし、その有効性を脅かすものでもない。どんなアプローチにも固有の利点とともに固有の守備備範囲や限界がある。あらゆる問題に対処できる万能のアプローチはない。いうまでもなく、社会構成主義にとって大切なことは自らの固有の視点と枠組を発展させていくことである。

このように考えると、社会構成主義的言説の退潮という現実は、次のような課題を提示しているように思われる。「格差社会論」に即していえば、格差社会という実在論的言説はなぜ他の

さまざまな言説を凌駕して強い影響力をもちえたのかという問いである。社会構成主義の視点から格差社会を論ずるとすればこのような問題設定になる。ただし、こうした問題設定は、格差社会の解決に真剣に取り組んでいるひとたちからすれば、傍観者的で無責任な態度に見えるかもしれないし、また、このような主張を公的におこなえば、それは格差社会論に対する「カウンタークレイム」としての意味をもってしまうことに注意が必要である。社会構成主義の視点はこのことも同時に教えている。あらゆる言説は程度の差はあれなんらかの政治的効果を帯びている（野口,2001）。したがって、それをどこでどう発表するかは個人の政治的判断にまかせるしかない。しかし、社会構成主義の立場からこの問題にアプローチするとすればやはりこのような問いにならざるをえないし、それが社会構成主義にとってきわめて興味深い問いであることにかわりはない。

4．物語の可変性と多様性

以上、社会構成主義が現在置かれている状況について考察してきた。社会構成主義は現在、実在をめぐる議論が隆盛となるなかでそのアリーナに参加することができず、ひと頃の勢いをなくしているように見える。では、このような状況のなかで、社会構成主義はどこに向かおうとしているのか。この問いを最後に検討しておこう。

まず、マクロな社会変動をめぐる領域以外に目を向ければ、社会構成主義的視点が意味をもつ領域はいくつも見つかる。医療や福祉などの臨床の領域はその代表である。これらの領域は、実在に関するきわめて強固な理論を基礎に組み立てられている領域であり、それがあまりに強固であるがゆえに、その実在論的言説のもつ社会的効果について反省的にとらえる視点がもちにくかった。そこに、それを可能にする視点が現われたことで、視界が大きく広がり、臨床実践の幅を広げることにつながった。とりわけ、患者の語るナラティヴ、病いのナラティヴに関する研究（Kleinmann,1988）は、患者の生きる世界を理解するうえで決定的な意味をもつものとして注目されることとなった。従来の生物医学に基づく患者理解とはまったく異なる視点が開かれたのである。

また、最近では、企業経営や組織経営の領域でも社会構成主義が注目され、とりわけ、社会構成主義を基礎とするナラティヴ・アプローチが注目を集めている。そこでは、企業などでのフィールドワークに基づき、それぞれの組織にはよく語られる物語があり、それが組織経営に影響を与えていること、また、組織の活動のプロセスがなんらかの物語の作成プロセスとして理解できることなどが報告されている（Czarniawska,1998）。組織には「参照される物語」と「作成される物語」があり、この両者が組織経営や組織活動において重要な役割を果たしているという新たな視点がもたらされている。これらの研究は、医療や福祉の領域における研究が主に患者やクライエントが語る個人の物語に注目したのに対して、集団や組織で共有される物語という水準に目を向けた点で重要な意義をもっている。個人レベルの「小さな物語」と社会全体を覆う「大きな物語」についてはこれまでもさまざまな形で言及されてきたが、その中間

にある組織集団レベルの物語に関する研究は相対的に少なかった。そこに光が当てられるようになったといえる。

この領域はいうまでもなく、経済学、経営学、社会心理学などを基礎理論として発展してきた領域で、それらの視点に基づく研究が一定の水準に達し、新たな理論的革新が生じにくい状況が続いていた。そうした中で、言説や物語といったこれまであまり検討されてこなかった概念に注目が集まるようになったといえる。一般に、社会構成主義的認識は、実在に関する議論が膠着して出口が見えないとき、あるいは、実在に関する議論がほぼ出尽くして新たな視点が待たれているときに本領を発揮する。この意味で、社会構成主義が医療や福祉などの臨床の領域、あるいは、組織経営などの領域で注目されたことはある意味で必然的だったといえる。

これらの領域から学ぶことができるのは、社会的に構成される言説のなかでも「ナラティヴ」という形式のもつ独特の意義についてである。社会構成主義は言説一般を対象としているが、言説のなかでも「ナラティヴ」という形式がもつ独特の機能に着目するのがナラティヴ・アプローチである（野口,2002）（野口,2005）。

「ナラティヴ」は出来事を時間軸上に並べて語るという点に形式的な特徴をもつ。この言説形式は、もっとも素朴な言説の形式のひとつであり、幼児が最初に覚える言説形式のひとつでもある。その特徴は、これと対極にある言説形式である「セオリー」と比較するとわかりやすい。「セオリー」は個別の時間軸を離れて、一般的な時間軸のなかでの要素間の関係について言及する抽象度の高い言説形式である。これに対して、「ナラティヴ」はあくまでも特定の個別の時間軸のなかで展開する具体的で直接的な言説形式である。その分、「セオリー」のような一般性をもつことができないが、にもかかわらず、私たちは「ナラティヴ」から多くのものを学び影響を受けている。子供たちは童話や民話から何かを学び、大人たちは小説やドラマや映画から何かを学んでいる。「ナラティヴ」はわれわれの生活のいたるところに浸透し、われわれの日常世界の一部を形作っている。また、小説や映画のようなフィクションの世界だけでなく、われわれは日常の世界の中で、自分の経験や誰かの経験を「実はこんなことがあったんだ」というようにナラティヴの形式で説明する。また、組織や集団がなんらかの困難に直面したときも、「そもそもの問題はあそこから始まったのではないか」というようにナラティヴの形式で理解し、その物語的展開の延長上で次の対応を考えたりする。

このように考えるとナラティヴという形式はわれわれの日常世界を理解可能かつ説明可能なものにするうえできわめて重要な役割を果たしていることがわかる。こうして、ナラティヴ・アプローチは社会構成主義の展開に新たな視界を開いた。現実の社会的構成における言説の働きをナラティヴという視点から検討するという新たな視界である。現実を構成するうえで言説はさまざまな役割を果たしているが、それらの言説のなかでナラティヴはどのような固有の役割を果たしているのかという問題である。

その際、ひとつの有力な分類軸となるのが、さきほど述べたナラティヴとセオリーの対比である。ナラティヴは出来事を具体的な時間軸上に位置づける言説形式であり、セオリーは要素

の一般的関係を述べる言説形式である。この区別は、ブルーナーによって明示化された「ナラティヴ・モード（narrative mode）」対「パラダイム・モード（paradigmatic mode）」の区別に対応しているが、ブルーナーはこれを人間の認識方法の基本的二類型として位置づけた（Bruner,1986）。社会構成主義の立場に立てば、この区別は、個人の認識方法ではなく、社会的現実を構成する二つの構成要素として位置づけ直すことができる。認識方法という場合は、個人の中にある認知的なメカニズムとしてイメージされるが、現実の構成要素という場合には、ある現実が社会的な現実として、すなわち、複数のひとびとによって共有されている状況がイメージされる。こうして、個人が現実をどう見ているかではなく、ある現実がどれだけひとびとに共有されているかという「社会的現実」について分析することが可能になる。

たとえば、何か困った問題が生じたときに、あるセオリーに基づく分析が関係者の間で共有されて、それに基づいた対応が積み重ねられていくという場合がある。これは、現実がセオリー・モードで構成されていることを意味する。一方で、何か困った問題が起きたときに、これまでの経過を物語風に語って次の展開を予想したり、それに備えたりする場合がある。こうした場合、現実はナラティヴ・モードで構成されている。もちろんどちらか一方だけではなく、両者を組み合わせて、ある部分はセオリーで理解し、ある部分はナラティヴに理解するということもすくなくないが、いずれにせよ、われわれはこの二つの形式を用いて現実を有意味なものとして構成している。現実の社会的構成において、この二つの形式はその基本的な構成要素となっている。

このような視点に立つとき、ある現実の成り立ちに関して次のような検討課題が生まれる。

①ある現実は、セオリーとナラティヴのどちらによって主に支配されているのか。
②ある現実が、あるセオリーによって支配されているとして、なぜ、他のセオリーではなく、そのセオリーなのか。
③ある現実が、あるナラティヴによって支配されているとして、なぜ、他のナラティヴはなく、そのナラティヴなのか。

以上は現実の成り立ちに関する静態的な説明であるが、現実の変動についても同様の問いを立てることができる。

④ある現実を支配するものが、あるセオリーから別のセオリーに変わるとき、そこで一体何が起きているのか。
⑤ある現実を支配するものが、あるナラティヴから別のナラティヴに変わるとき、そこで一体何が起きているのか。
⑥ある現実を支配するものが、あるセオリーからあるナラティヴに、あるいは、あるナラティヴからあるセオリーへと変わるとき、そこで一体何が起きているのか。

さらに、この変動に対する問いは、次のような実践的問い、臨床社会学的問いへとつながる。

⑦ある現実から別の現実に移行するためには、どのような方法があるのか。

言うまでもなく、この最後の問いは社会構成主義の立場に基づく臨床家たちが「ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリー」という概念を用いて積極的に追求してきた問いにほかならない(White & Epston, 1990)。われわれ社会学者も臨床社会学の立場に立つときにはこの問いが重要となる。そして、その際には、研究者もなんらかの現実の構成のプロセスに否応なしに参加してしまうことを前提に、その参加者のひとりとしてふるまうことが要請される（Noguchi,2008)。

一方、臨床社会学の立場に立たない場合でも、上にあげた①から⑥までの問いは社会構成主義の正統な問いとなりうる。これらの問いは、たとえば臨床現場や企業組織などの比較的小さな社会に関しても適用できるし、国家や国際社会などの文字通りマクロな社会にも適用できる。臨床現場に関しては主に臨床社会学の分野で研究が進められており（野口,2005）（Noguchi,2008)、マクロな社会状況については、周知のとおり、Spector&Kitsuse（1977）以来の社会問題の構築主義の系譜に連なる多くの研究の蓄積がある。もちろん、後者の諸研究が上の①から⑥の問いを明示的に掲げているとは限らないが、すくなくとも実質的にはこれらの問いが含まれているとみなすことができる。

一方、社会問題の構築主義的研究が切り開いた方法とナラティヴ・アプローチとの違いについても明確にしておく必要がある。そのもっとも大きな違いは、両者が注目する言説の種類、分類の仕方にある。社会問題の構築主義は、「クレイム」や「レトリック」という概念を武器にして特定の現実が構成されていく過程を丹念に描き出す。これに対して、ナラティヴ・アプローチは「ナラティヴ」と「セオリー」という言説形式の分類を武器にして、現実の成り立ちを描き出す。もちろん、ナラティヴ・アプローチが使える武器が「ナラティヴ」と「セオリー」という概念だけに限定される必要はまったくない。今後さらに、ナラティヴ・アプローチ固有の概念や理論の展開が期待されるが、しかし、いまのところ、ナラティヴへの着目はそれともっとも異なる言説形式であるセオリーとの対比においてその有効性を発揮している。

ナラティヴやセオリーはいかにして現実を構成するうえで覇権を握るのか。そして、それらはまたどのようにして覇権を失い、別のナラティヴやセオリーに取って代わられるのか。社会構成主義にもとづくナラティヴ・アプローチはいまこのような研究の視界を開きつつある。それは、社会問題の構築主義が切り開いたのとは別の視界である。われわれは、ナラティヴとセオリーの多様性と可変性についてさらに検討を進める必要がある。社会構成主義はいまこのような課題に直面しているように思われる。

【文献】

Anderson,H. & Goolishian,H., 1992, "The client is the expert". in McNamee,S. & Gergen, K.J. eds. *Therapy as social construction*. Sage Publications. （野口裕二・野村直樹訳、『ナラティヴ・セラピー　社会構成主義の実践』、金剛出版、1997）

Bruner,J. , 1986, *Actual Minds, Possible Worlds*. Harvard University Press. (田中一彦訳、『可能世界の心理』、みすず書房、1998)

Czarniawska,B. , 1998, *A narrative approach to organization studies*. Sage Publications.

Gergen,K.J. ,1994, *Realities and relationships*. Harvard University Press. （永田素彦・深尾誠訳、『社会構成主義の理論と実践』、ナカニシヤ出版、2004）

Kleinman,A. ,1988, *The illness narratives. Suffering, healing and the human condition*. Basic Books. （江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、『病いの語り　慢性の病いをめぐる臨床人類学』、誠信書房、1996）

三浦展, 2005, 『下流社会』、光文社

中河伸俊・北澤毅・土井隆義, 2001,『社会構築主義のスペクトラム』、ナカニシヤ出版

野口裕二, 2000, 「サイコセラピーの臨床社会学」、大村英昭・野口裕二編『臨床社会学のすすめ』、有斐閣

野口裕二, 2001, 「臨床のナラティヴ」、（上野千鶴子編、『構築主義とはなにか』、勁草書房）

野口裕二, 2002, 『物語としてのケア　ナラティヴ・アプローチの世界へ』、医学書院

野口裕二, 2005, 『ナラティヴの臨床社会学』、勁草書房

Noguchi,Y., 2008, "Clinical sociology in Japan". Jan Fritz (ed.) *International Clinical Sociology*. Springer.

Spector,M. & Kitsuse,J.I. ,1977, *Constructing social problems*. Cummings Publishing. （村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳、『社会問題の構築』、マルジュ社、1990）

上野千鶴子, 2001, 『構築主義とは何か』、勁草書房

山田昌弘, 2004, 『希望格差社会』、筑摩書房

White,M. & Epston,D. , 1990, *Narrative means to therapeutic ends*. Norton. （小森康永訳、『物語としての家族』、金剛出版、1992）

（のぐち　ゆうじ　東京学芸大学）